

III, IV Stage: 一の腹肢の存否より既に識別出来るが, 第二触手の發育程度も異なる。IV, V Stage: 一体長の相違は余り明らかでないが, V Stage では一の腹肢及び第二触手の分節の完成。♀の哺育腔の完成により両者を識別し得る。Gumacea が成体に於て顕著な sexual dimorphism を示すことは古くより知られているが, 特の一の第二触手の分化は既に II Stage に於て起るに反し, ♀の第二触手は形態学的に終生 larval form を保つ。

アカイエカの内因性日周活動におよぼす 幼虫期・蛹期の光条件の影響

千葉喜彦 (東北大・理・生)

アカイエカ *Culex pipiens pallens* は恒暗条件下でも日周期活動を有し, この活動が明→暗, 唯一度の変化, いわゆる single stimulus によって誘起されることは, 卵期から恒明条件下で飼育してきた成虫を恒暗条件に移すとその時から日周期的活動を示すようになることから明らかである。ところで, 卵期から 12 時間明 12 時間暗あるいは恒明条件下で飼育してきたものを幼虫, 蛹各期内の適当な時以後恒暗条件に移したところ蛹期 (約 50 時間) 後半に恒暗に移してえた成虫にのみ日周期活動が認められた。従ってこれまでの実験結果を総合すると, single stimulus は蛹期後半および成虫期において effective であるといえる。

有明海の貝類の特異性

波部忠重 (国立科学博物館)

有明海の貝類は巻貝類よりも二枚貝類が種類数や数量が遙かに多く, 湾口部ではシマナミマガシワモドキ, ホクロガイ, ヒナノヒオウギ, *Crassostrea irregularis* が多く, 湾奥部でシズクガイ, イヨスダレ, チヨノハナガイ, ヒメカノコアサリが多いが, 多くの内湾で指標種であったチゴトリガイ, マメグルミ, ミジンシラオガイ, ケシトリガイは殆んど採集されない。シロバトガイが甚だ多い。

また, 湾奥沿岸部にはハイガイ, クマサルボウ, ササゲエガイ, アゲマキ, アオアサリ, チリメンユキガイ, シマヘナタリ, クロヘナタリ, アズキカワ

ザンショウ, サキグロツメタガイ, ウネハナムシロ, オカミミガイ, ウミマイマイ等が棲息し, これ等は瀬戸内海, 伊勢三河湾, 東京湾, 浦戸湾にその一部が棲息するにとどまり, ハイガイが東京附近の貝塚に多量に出土するにかかわらず東京湾に産しないように次第に分布が狭ばまりつつある種である。そして, またそれ等は大陸沿岸に広く分布する大陸沿岸系種であり, 有明海はこうした貝類群を最も多く産する特異な内湾である。

イモリの水晶体再生に及ぼす抗体の影響

小川 正 (名大・理・生)

螢光抗体法とゲル内沈降反応法によってイモリの水晶体再生途上においては水晶体特異抗原は虹彩の脱色前後に出現し, それが背側虹彩の一部に局在していることが確かめられている。一方細胞又は組織は同種抗体の存在下で何らかの影響を受けることが知られている。水晶体再生の初期の段階で抗水晶体抗体を作用させると再生に当る細胞の構成成分の変化が明らかになると期待される。脱色前後において抗体は背側虹彩の細胞に選択的に作用し壊死に至らせる。そして抗体を除くと残余の部分から新しい再生芽が形成される。抗体の影響を受ける組織は脱色前後における背側虹彩の一部と以後の再生過程における再生体及び正常な水晶体に限られる。これらのことから形態的变化がまだ見られない脱色前後の背側虹彩の細胞の構成成分の変化は水晶体再生現象と非常に密接な関係にあり, この部分の細胞の化学的分化はこの時期に進行しつつあるか, または完了していると想像される。

発 生

第 II 会場 第 1 日

電子顕微鏡的レベルにおける蛔虫卵の発生学 I. 成熟過程から第 1 卵割迄の 細胞質構造の推移

只野 柳・只野正志 (岐阜大・学芸・生)

受精後の細胞質は電子密度のやや低い均一な物質のなかに電子密度の低い粒状物が散在している (普